

図書館の環境整備を考える ～ 館内サインとコーナー作り ～

発表者 草野 美恵（玉野市立宇野中学校）
三宅 典子（玉野市立八浜小学校）
松田 亜希（玉野市立第二日比小学校）
浅野 由子（玉野市立八浜中学校）
與田 純子（玉野市立日比中学校）

1. はじめに

玉野市内には、小学校が分校1校を含む15校、中学校が7校の22校があり、司書は全校配置されているが、平成23年度は、小学校14名、内1名が分校を兼務、中学校7名、合計21名が勤務している。ここ数年、正規職員の退職に伴い、23年度は、正規職員が1名となり、勤務年数が5年未満の司書が全体の半数以上を占めている。非常勤職員18名は、勤務時間が7時間。他に嘱託職員が2名配置されている。

2. 研修について

月1回の研修と図書館事務についての新任研修も年数回開催している。

平成22年度は、利用しやすい図書館や児童生徒の興味を引き出し、読書の幅を広げることができるような図書館をめざし、「図書館の環境整備」をメインテーマとした。経験年数に関わらず続けてやっていけることを、校種を超えて研修することになり、サブテーマを利用者にわかりやすい「館内サイン」と児童生徒を惹きつける「コーナー作り」に絞り、2グループに分かれて研修を進めてきた。

3. 館内サイン

利用しやすい図書館とはどんな図書館なのか？ 自分たちの図書館はどうだろうか？ あらためてそれぞれの学校の現状を見つめ、問題点をさぐり、話し合いの中で、共通の問題としてあがってきたのが、子どもたちが自分ひとりで、目的の本までなかなかたどり着くことができない、ということだった。そこで、本の配置をわかりやすく示すために、館内サインの見直しを行った。

まず、各学校の分類別の本の配置を表す案内板や見出し

し板を持ち寄り、それぞれの現状と問題点について話し合った。持ち寄った物には、市販の物やハンドメイドの物などいろいろあったが、図書館の広さ、書架の位置によって見づらい物や、子どもによっては、本の内容を表す言葉が、理解しにくいものもあった。

その結果、利用者にわかりやすい案内板や見出し板とは、図書館の広さ、書架の配置、子どもたちの現状を把握したうえで、板の大きさ・形・分類を表す“ことば”・字体・文字の大きさ・文字の色・背景色などを考える必要があるという結論に至った。

そこで、玉野市立荘内小学校をモデル校として取り上げ、初めに新しく案内板を作り、試行してみることにした。

以前は市販の案内板を置いていたが、図書館の面積や、書架の高さ・配置に対して、案内板の大きさや文字のサイズが小さく、近くまで行かないと本の種類がわからなかった。

新しい案内板の作成は、全員で荘内小学校の図書館を見学し、作成の計画を立てることから始めた。また同時に子どもたちにわかりやすい“分類を表すことば”を考え、「案内板のことば(玉野版)」として表にまとめてみた。

次に、それぞれが自分の学校の案内板の試作品を作成して持ち寄り、それらを参考に荘内小学校にあう案内板を作り、この中から良い所を採用して荘内小学校の案内板を作成した。

図書館の面積、書架の高さを考慮して、四つ切りの画用紙サイズで縦長の案内板を作ることにした。分類を表すことばを「案内板のことば(玉野版)」から選び、字体はHGP 創英角ゴシック UB、文字の大きさは九つ切りサ

イズに均等に入るようにした。文字の色は分類の数字を白色、言葉を黒色に、背景の色は分類別のラベルの色に合わせた。



各学校が作成した試作品(左) 新しい案内板(右)

以前使っていた市販の案内板に比べて文字が大きくなり色もはっきりして目立つので、図書館を見回した時にすぐに案内板が目に入るようになった。新しくなった案内板や図書館内を見て、子どもたちは歓声をあげて喜んでくれた。



新しい館内サインの荘内小学校館内

●成果と課題

新しい案内板によって、分類別に配架されている本の場所が早くわかるようになったが、子どもたちが自分で探している本の場所にたどり着くには、まだ少し時間がかかるようだ。

今後は、荘内小学校での試行を元に、各学校の図書館に適した案内板を作成したいと思う。そして、子どもたちが、よりスムーズに探している本の場所にたどり着くことが出来るように、今後も見出し板等の館内サインの見直しを行っていきたいと思っている。「見出し版のことば(玉野版)」も検討中だ。また、分類と本の配置の関係を、子どもたちに理解させるための利用指導の徹底も不可欠だと思う。

館内サインは、利用者と資料を結びつける大切なサインで、館内の雰囲気作りにも大きな効果を持っている。

今後も館内サインを充実させ、利用しやすい図書館作りに努めていきたい。

4. コーナー作り

研修を進めるにあたり、それぞれがどのような考えを持っているのかを話し合った結果、「古いけれど良書である」「書架に並ぶと目立たず、手に取ってもらえない」などの埋もれた本に児童・生徒の興味を引きつけたいという意見が多かった。児童・生徒はどうしても新しい本、綺麗な本、人気のある本を求めがちである。そうした児童・生徒たちの興味の幅を広げ、良書を届けることは、学校司書の基本的かつ大切な仕事であると考えた。

とはいえ、校種や展示スペースの広さ、生徒の読書傾向など、一校一校違うのが当たり前であり、また、各司書の思いもある。月ごとにひとつのテーマに絞り、それに沿って研修を進めていこうという意見も出たが、話し合いの末、各校でテーマを決め、その実践を持ち寄ることになった。そうすることにより、それぞれの工夫や児童・生徒の反応や、課題などを知り、そこから新たな創意工夫も生まれ、自らの経験も生かしてよりよいコーナー作りができると考えた。

新しいものや、絵が多く挿絵が綺麗なもの、薄い本、人気の本は手に取られやすいが、一方興味の偏りも多く見られる。「世界を広げる」、「知識を得る」、そのために読んでほしい本は数多くあるが、背表紙だけではなかなか伝わらない。「子どもたちが本を選ぶ基準」からはみ出した本は、書架で眠るばかりでなかなか手に取ってもらえないのが現状だ。私たちの仕事の一つに、良い本を活かすこと、いかに本を手にしてもらうか、読んでもらうか、というのがあると思う。授業で使う本も含め、様々な本に興味を持ってほしいと考えている。この研修を通して、これらの問題に解決の糸口を見つけたい。

選書は、季節や行事を意識しつつ、いろんなジャンルの本に触れあえるよう心がけた。コーナーをディスプレイしたり、棚差しでは目に留まりにくい本を面出することにより、埋もれた状態から存在をアピールしていった。

まず、各校が記録する年間実施一覧表を作成した。そして、その表に基づき、月ごとの展示に使用した図書を記録するための展示資料作成シートも同時に用意し、その都度、各校で記録していくことにした。

る。そして、司書の願いである「いろいろな本があることを知る」ということにもつながると感じた。

●月のコーナー作りの実践例（市内4校）

A 中学校の2月の展示テーマは『“チョコレート”がいっぱい』。バレンタインデーに合わせてこのテーマを設定した。レシピが書いてある図書だけではなく、書名に『チョコ』が入っている図書も並べてみた。なるべく手書きでPOPを作るようにし、温かい雰囲気 of 図書館が作れるよう工夫した。バレンタインデーということを意識しているので、可愛らしく見えるようにした。POPを貼っているとお得感があるのか、展示してある本を手に取り、嬉しそうに借りていく生徒の姿が多く見られた。POPを褒めてくれる生徒がいたり、「次の展示は何？」などの声も聞くことができ嬉しく思った。ただ、コーナーに集まる生徒が女の子中心となってしまい、男の子が少なかったのが、残念だった。

B 中学校の10月の展示テーマは『遊び』。学校祭が終わり、ホッとした時期にちょっとした息抜きを…ということで、このテーマを設定した。

B 中学校では、図書委員会の活動として月のコーナー作りをしている。教諭や司書があまり手をかけず、委員会の生徒達の感性や気持ちを大切に、テーマを決定し、選書している。いつもは読み物（9分類）が多いのだが、テーマの関係もあり、他の分類も増やし、いつもよりユーモア溢れるコーナーとなった。

C 小学校の11月の展示テーマは『読書週間！！読んでもほしい！先生のおすすめの本☆』。

C 小学校では、読書週間の時に中～高学年の児童が各自でおすすめの本の紹介文を書き、それを学年ごとに冊子にしたものを、館内に置いて自由に閲覧できるようにしている。それを次に借りる本の参考にしていく児童も多いという利点を活かし、今度は教職員からのおすすめの本ということで紹介してはどうかと考え、テーマを設定した。児童と同じように紹介文も冊子にし、もちろんおすすめの本も展示した。

ジャンルや新旧にかかわらず、多様な本が集まり、先生と本の組み合わせに児童は興味津々な様子だった。学年を問わず募ったこともあり、少し難しい本もあったが、児童は興味深く手に取っていた。

このように展示することで、普段、手にすることのない本でも身近な教職員の選書ということで注目を集め

D 小学校の1月の展示テーマは『読み語りで読まれた本』。他の学校とはちょっと違った、学校の特徴を生かした掲示板にしようと考え、展示している。特に工夫もない掲示ではあるが、学期中にこれだけたくさんの本を読んでもらえたんだ、と感じてもらえればいいと考えた。他の学年が読んでもらった本や、読んでもらった本のシリーズを借りる児童が多く見られた。本がスカスカにならないように違う本を並べていると、見るたびに目新しい本があるからか、気にして見ている児童が増えていった。読んでもらった本の一覧表も貼った。



D 小学校の
展示風景

●独自性のあるコーナー作りの実践例（市内2校）

E 小学校では、本の展示を3カ所で行っている。あたらしい本・季節や行事にあったテーマを決めた月ごとの展示。そして、毎日1冊司書が選ぶ、『きょうのおすすめの本』である。

選書は、ニュースや学校の行事・季節の行事なども考慮し、当日図書の時間のある学年に見合った本を選び、出版年が古く埋もれた存在の本もできるだけ表に出すようにしている。

紹介されている本を見て「こんな本もあったんだ」と気づいてくれたり、「きょうのおすすめは何？」と気にしてくれたり、「こんな本はどう？」と展示の本を探してくれる児童、自分で選ぶのに時間が足りなくて「おすすめの本にしよう」と借りてくれる児童など、嬉しい反応があった。1冊からシリーズに広がる、予約が続く、

その本の利用頻度が増えるという利点もあり、平均して紹介した本の 2/3 は当日に貸し出されているので展示効果はあったのではと思う。

F 中学校では、『今週の1冊』という展示を行っている。月別のテーマ展示を以前から図書委員会のメイン作業として行っているため、司書は違うことをと考えた。また、毎日来る生徒にも飽きられないよう、目新しさを演出するために週がわりではどうか…という思いから「今週の1冊」の展示を考えた。しかし、1冊だけでは借りられた時に寂しいので、テーマを決め、それに関連した図書の展示も行っている。

手書きのPOPも貼り、1冊を紹介し、その本の後ろにはテーマに関連した図書をずらりと置いている。最初は気付かなかった生徒も、目を追うにつれ楽しみにしてくれたり、言葉では何も言わないが、月曜日になるとコーナーにずっと向かう生徒が出てきたりしている。

●成果と課題

図書館の新しい展示は、必ず一度は子どもたちの目に留まり、興味を引く。書架におさまったまま、目立つことのなかった本たちが、こうして展示されることで子どもたちの手に取られていくことは、今までとは明らかに違う状況を作っている。いつもとは違うジャンルの本を目にする機会も増えた。

小学校では、週一時間確保されている図書の時間に、新しい展示コーナーは必ず一度は児童たちの目にとまり、中学校では、展示コーナーがあることすら気づいていなかった生徒が、展示を続けていくうちに楽しみにするようになった。また、貸し出しに至らなくとも、「こんな本があったのか」、「この本もあったんだ」という気づきを得ることもできた。長い間、書架から動かさず、貸し出されなかった本に光を当てるのが、わずかながらでもできたように思う。

コーナー作りの実践を毎月持ち寄ることによって、他校の様子も知ることができ、とても学ぶことの多い、収穫のあった研修となった。

小スペースを活かした展示方法や、逆に広く埋めるのが大変だったスペースをどのように活用すればよいか、ラミネートや色画用紙、折り紙、などの利用法などからも刺激を受け、自校でも挑戦してみようという意欲もわいてきた。良いところを取り入れて、今までしてきた展示に自分なりに変化をつけることもできた。何より

も紹介した本が子どもたちの手に取られ、借りられていくことがとても嬉しく、司書の専門性を伸ばし、次につながっていく力となった。今後もそれぞれの学校に合った展示方法で、児童・生徒を惹きつける展示を計画的かつ継続していくことに意味がある。そのためには、司書が日々、様々な資料に目を通し、スキルアップを図るとともに、児童・生徒たちとのコミュニケーション、また教職員とのコミュニケーションを図ることで、それぞれが今何を求めているのかを常に探ることも必要だと考えている。

子どもたちがいろいろなジャンルの本を知るいい機会にはなったものの、本を手にする子どもが限定されているという現実を目を背けることはできない。コーナーを続けると似たようなテーマになってしまい、目新しさがなくなってしまうという問題も見え、展示場所、展示方法など工夫しなければならないという反省も出てきた。

改善しなければならないこと、工夫が必要なところはいろいろあるが、『継続は力なり』。計画的かつ継続することに意味がある、という言葉をお忘れず、これからも、展示コーナーを設けることにより、より多くの利用に繋げ、児童・生徒の学習や感性の幅を広げられる図書館を目指していきたいと思う。

5. おわりに

「館内サイン」の研修では、サインや見出しの工夫の仕方で子どもたちがわかりやすく利用しやすい図書館作りができた。「コーナー作り」の研修では、子どもたちが今まで気にしていなかった本の存在に気づいたり、ディスプレイをすることで図書館に来やすい雰囲気作りができた。これらのことは、子どもたちの図書館利用に大いにつながったのではないかと考えられる。

今回の研修はまだ途中の段階だが、児童・生徒の学習や感性の幅を広げ、情報の発信基地や読書センターとしての学校図書館を目指し、継続していきたいと考えている。



質疑応答

Q コーナーに置いた本を貸出制限しているのか。

A テーマに幅を持たせていろいろな本を用意しておき、借りられたら次の本で埋めるようにしている。月によっては、2週間貸出不可とし、その後、貸し出しをする学校もある。その後は、貸し出されたら予約をとる。

Q 図書館オリエンテーション以外で分類の話をする機会はあるのか。

A 小学校では2年国語で図書館の内容が取り上げられている。また、図書の時間に司書からの話ができるので、学年に応じて分類の説明を繰り返している。

Q 分類・配架は高校生でも理解できていないと感じる。小中学校ではどの程度教えているのか。どの程度定着できているのか。

A 玉野市の小中学校では、「本棚の地図」を掲示している。これを見ながら、折にふれて教えているので大まかに覚えている。

A 中学校では1年生の始めのオリエンテーションの1回しか機会がない。案内板によって一目で配架のわかる図書館を目指している。